



学知を深めつつ、 多様性への感応力と 他者への共感力をはぐくむ



もりやまたかみ
森山 工理事・副学長

1984年東京大学教養学部教養学科卒業。1994年同大学院総合文化研究科博士課程修了。博士(学術)。専門分野は文化人類学。東京大学大学院総合文化研究科長・教養学部長、東京大学執行役・副学長などを経て現職。

SUMMARY

東京大学が「大学」である以上、さまざまな分野の学知を学び、深めることは当然のことです。もちろん東京大学でも、入学した当初の学生の特定化された学術分野への関心や志向性を大切にしています。けれども、そうした関心や志向性を踏まえつつも、それ以外の学術分野に学生を晒すことで、学術分野とはこれほどに多様なのだということ、そして、それらの多様な分野の協働によって、さらに新たな学術分野が立ち現れるということを学生に体得してもらおうとしています。

これは学術分野の多様性に学生を晒すということですが、ひとたびキャンパス生活に参入したならば、多様性はさまざまな局面で見いだすことができます。出身地域の多様性。出身文化や言語の多様性。国籍の多様性。ジェンダーや性自認の多様性。年代の多様性。障がいの有無やそのあり方についての多様性、などなど。

学術分野の多様性を架橋するのみならず、そうした「多様な多様性」を意識化し、その多様性を感応力をもって受け止めるには、何よりも他者に対する共感力が必要です。

ですから、東京大学は学知の深化にとどまらないキャンパス生活を学生に提供しようとしています。学術分野の架橋というのは学知の領域のことからです。けれども、それを踏まえつつ、「多様な多様性」に感応しながら、それらを架橋して他者への共感力をはぐくむこと。東京大学はそのような学修環境をこれからも充実させてゆきます。

01 学部段階で 3つの基礎力を鍛える

藤

井 輝夫総長が就任初年の2021年度に公表した「Tokyo Compass 多様性の海へ」対話が創造する未来」は、東京大学が目指す理念と基本方針です。「多様性と包摂」の理念を重視し、東京大学を「世界の誰もが来たくなくなる学問の場」にしたいことを目指しています。藤井総長が特に大事にしている「対話」を通じて新しい大学モデルを構築します。

ここの「対話」とは、単なる情報交換ではなく「知るための実践」であり、そのためには「問いを立てる力」が必要とされ、「ともに問う」ことで対話が深まることになります。対話を通じてともに問題に向き合い、感じ、考えることで理解と信頼が育まれます。対話は多様な声が響き合う協奏であり、未来を創造するには不正や差別への感受性と、課題に真摯に向き合う姿勢が求められます。教育においては、東京大学がこれまで人類が受け継ぎ発展させてきた学問の蓄積を学ぶだけでなく、このような「対話」の実践を通じて、新たな「知」と「人」と「場」を統合する活動を目指します。これにより、より良い未来社会の創造に貢献する人材を輩出していきます。

東京大学は、特に学部段階では「自ら原理に立ち戻って考える力」「忍耐強く考え続ける力」「自ら新しい発想を生み出す力」という3つの基礎力を涵養します。そのために、学生が最初の2年間を過ごす教養学部前期課程において、基礎科目、展開科目、総合科目、主題科目の4つの科目群で、我が国随一の多様な授業科目を提供しています。

さらに、学生の国際感覚を鍛えます。世界の

02 幅広い教養教育で 後期課程に向け「進学選択」

他

大学に見られない東京大学の学部教育の大きな特徴は、入学時に専門を決めず、教養学部前期課程を経てから専門を選ぶ「Free Specialization」に基づく「進学選択制度」にあります。前期課程においては、リベラルアーツ教育を重視し、特定の専門分野に偏らない広い視野と総合的な判断力を養います。そのために、幅広く、かつ専門課程に進むために必要な基礎知識や知的技能を身につける教養教育と、最先端の専門研究に触れ、将来の進路や専門教育への意欲をかき立てる「Open House」を教育の2つの柱としています。

度により、後期課程における自分の進む専門分野の学部・学科などを主体的に選択し、進学先を決定することになります。前期課程各科目から後期課程各学部への進学先はおよそ上記の図のようになります。各学部には指定科目以外のどの科類からそれぞれ一定数の進学を認める「全科類枠」もあります。

03 初年次ゼミナールなどの 特徴的な教育プログラム

東

京大学では、国際感覚を鍛える教育の充実や主体的な学びの機会の提供を進め、教養学部前期課程教育の活性化に継続的に取り組んでいます。その柱の一つが「初年次ゼミナール」です。

この授業は「教養授ける」「ティーチング」から「自ら学ばせる」「ラーニング」への転換を目指した取り組みの一環として設計されました。大学に入学して最初のセメスターに開講される、全学生が受講しなければならない必修科目です。文科(文科学向け)・理科(理科学向け)とも、先端研究に取り組むさまざまな分野の教員が、専門性を活かした授業を展開しています。学生の積極的な参加を促すため、1クラス20名程度の少人数制で実施しています。ほと

04 英語教育など実践的な 教育プログラム

前

期課程では、英語教育においても学生の主体的な学びを重視する実践的なプログラムを実施しています。

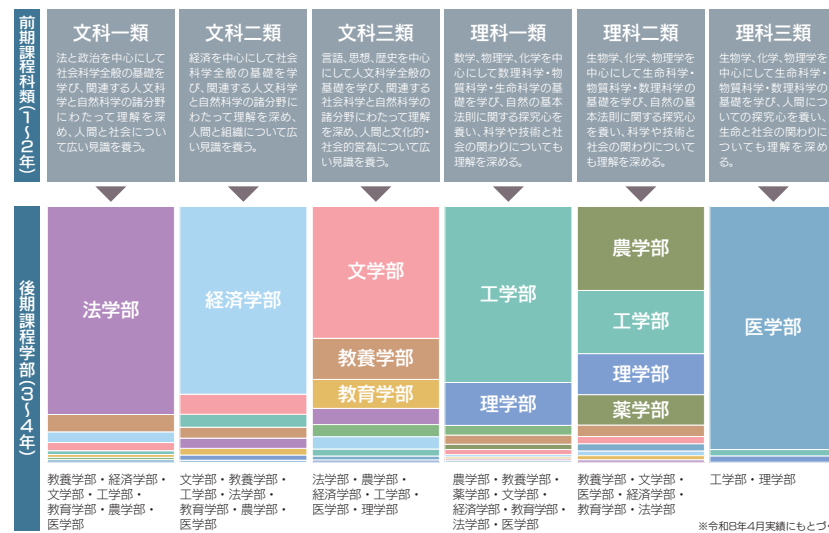
学術的な文筆作成能力を養う少人数授業として、理科生向けの「ALWOS」(Active Learning of English for Science Students)や文科生向けの「ALWAV」(Active Learning of English for Students of the Arts)を開講しています。さらに、英語で論理的かつ流暢に議論ができるようなスピーキング力の養成を

大学HP



東京大学
〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1
入試事務室 TEL 03-5841-1222
https://www.u-tokyo.ac.jp/

PICK UP 科類の特徴と学部進学との関係



前期課程の各科類から主として進学できる後期課程の学部は上記の表のとおりですが、2006年度の新入生から、すべての科類からどの学部にも進学できる枠が設けられています。なお、全科類からの進学枠を含め、上記の表に示されていない進学の道もあります。(『東京大学で学びたい人へ 2027』より作成)

※令和8年4月実績にもとづく

(1) リベラルアーツ教育
「東京大学憲章」にも掲げられているように、東京大学では学部教育の基礎としてリベラルアーツ教育を重視している。リベラルアーツを「種々の制約から自らを解き放ち、自由かつ柔軟に思考するための知識や技法」と定義したうえで、専門を学ぶ前は「これから学ぶ学問のための土台となり、真理探究の精神を涵養する」ものとして、専門を学んだ後は「自らの専門分野を相対化し、他分野や他者と関連づけながら柔軟かつ責任ある思考ができる素地を培う」ものとして、位置づけている。

(2) グローバル教養科目 (GLA: Global Liberal Arts Courses)
グローバル教育センターが提供する、現代の世界が直面する喫緊の課題を英語あるいはほかの言語で学ぶ授業科目。特に「SDGs」(持続可能な開発目標)に関する分野横断的なトピック(ジェンダー、ダイバーシティ、健康、貧困、GXなど)をテーマとする。交換留学生を含む全学部の後期課程学生・大学院生が履修でき、原則20名程度の少人数で、ディスカッションなどのインタラクティブな活動を中心に授業を展開される。

【グローバル教養科目ウェブサイト】
https://globe.u-tokyo.ac.jp/ja/globalliberalarts.html

(3) 国際総合力認定制度 (GGG: Go Global Gateway)

東京大学では、世界の多様な人々と共に生き、共に働く力を「国際総合力」と名付けている。国際総合力認定制度 (GGG: Go Global Gateway) は単なる語学の堪能さや表層的な外国理解でなく、異文化や他者について深く考える教養と洞察力を修得する契機となることで、学生が国際感覚を養い、活躍の場を広げられるようになることを目的としている。国際的なアクティビティに取り組む、条件を満たした場合に、国際総合力の基礎的な力を身に付けたものとして認定証を授与する。

(4) 全学交換留学 (USTEP: University-wide Student Exchange Program)

東京大学が学生交流覚書を締結している海外大学(協定校)と1学期~1年間、学生を交換する「交換留学」を大学全体で実施するものが「全学交換留学 (USTEP)」である。東京大学が授業料を徴収せずに協定校の学生を受け入れる代わりに、東京大学の学生は東京大学に授業料を納めれば、留学先での授業料は支払わずに協定校で授業を履修したり、研究指導を受けたりすることができる。全学交換留学は、資格条件を満たす学生であれば、どの学部・研究科の学生でも応募することが可能となっている。

(5) グローバルリーダー育成プログラム (GLP)

募集・選抜型ではなく、構成要素となる授業等を主体的に履修・修了することによって、プログラム修了を目指すことができる。学部後期課程学生向けだが、一部の構成要素は学部前期課程のうちに取り組むことが可能。修了した学生には、修了証が授与されるとともに「国際総合力+ (プラス)」が認定される。



駒場 | キャンパス正門

企画した「E-JOW」(Fluency-Oriented Workshop) も開講しています。これらの科目は前期課程の必修科目で、全学生がグローバル社会に対応する能動的な英語運用能力の修得を目指します。

また、「主題科目」の中には、異なる言語・文化の環境に触れ、国際交流の現場を体験し、グローバルな視野を養うことを目標とした「国際研修」もあります。授業は、必ずしも高度に専門的なものではなく、リベラルアーツ教育の「総合的な知」の構築を目指す授業内容となっており、学生にとって最初の海外経験を後押しする科目として位置づけられています。

こうした英語による実践的なプログラムを後期課程でも継続できるよう、2003年度に設立されたグローバル教育センターが「グローバル教養科目」を提供しています。

「グローバル教養科目」は、交換留学生を含む全学部の後期課程学生・大学院生が、現代社

会が直面する喫緊の課題を英語で学ぶ授業であり、特に「SDGs」(持続可能な開発目標)に関するトピック(ジェンダー、ダイバーシティ、健康、貧困、GXなど)をテーマとしています。クラスは、原則20名程度の少人数制で、アクティブラーニングで行われます。2025年度からは、英語以外の6言語でも展開しています。

05 多彩なプログラムで国際感覚と共感力を身につけた次世代の人材を育成

急速に変化する現代の世界において、異なる背景や価値観を持つ人々と意義深い対話を通して共生する道を探るためには、国際感覚の涵養が不可欠です。東京大学では、すべての学部学生に向けたグローバル教育の取り組みとして、「国際総合力認定制度(GG: Global Gateway)」が用意されています。大学生生活を通じて、世界の多様な人々と共に生き、共に働く力(国際総合力)を身につけられるよう、学部生全員が国際総合力認定制度(GG)に登録することになっています。この制度は、学生の国際的な学習や交流の機会への参加を後押しする制度です。

まず、東京大学の国際的な活動・修学に関するオンデマンド型の基礎講座を受講します。基礎講座

大講堂(安田講堂)



協力を得て実施するものです。学生は、地域から提示された課題について、現地で体験を積みながら自ら考え、共に、学内のあらゆるリソースを活用して問題解決の糸口を探り出すなど、現地と大学を行き来しながら、一年をかけて課題解決の道筋の提案を行います。

07 インクルーシブキャンパスの実現に向けて

京大は、多様な学生構成を目標の一つとして掲げています。その中でも、留学生の存在は重要です。現在、世界各国からやってきた約8000名の留学生が東京大学に在籍しています。まさに世界から優秀な人材が集うグローバルキャンパスが形成され、キャンパスにいながら国際交流ができる環境が整えられつつあります。

多様な学生構成の実現と学部教育のさらなる活性化を目指し、学校推薦型選抜(旧推薦入試)を実施しており、2021年度入試から1

(6) グローバルリーダー育成プログラム-I (GLP-I)

グローバル教育センターを中心に東京大学が英語で提供するさまざまな教育プログラムを通して、国際社会で活躍するためのリーダーシップを涵養する認定プログラム。構成要素には、グローバル教養科目(GLA)、アクティブラーニングを促す最先端のオンラインプラットフォームを用いたグローバルリーダー育成プログラム科目(GLC)、メンター教員のサポートを得ながらグローバル課題に対する理解を深め、海外体験の準備に取り組むGlobal Capstone、GLP-Iでの学びの成果を発表するGlobal Leadership Summitなどがある。取り組み状況に応じて、海外体験のための奨学金を最大2回受給することができる。

(7) グローバルリーダー育成プログラム-II (トライリンガル・プログラム) (GLP-II (TLP))

日本語・英語に加え、もうひとつの言語(ドイツ語・フランス語・中国語・ロシア語・スペイン語・韓国朝鮮語)を高度に習得することを目指す。グローバル教養言語科目(L-GLA)、グローバル教養科目(GLA)など、グローバル教育センターを中心に東京大学が提供するさまざまな言語「を」学ぶ授業科目、さまざまな言語「で」学ぶ授業科目、海外体験などを通して、国際社会で活躍するための高度な言語運用能力を身につけ、文化理解を深める。海外体験のための奨学金が用意されている。

(8) フィールドスタディ型政策協働プログラム

地域から提示された課題に対し、チームで協力して解決の道筋提案を行うプログラム。学生は、現地に赴き活動を行うことに加えて、学内の多様な研究者や豊富な資料などのリソースを活用した調査や地域関係者とのオンラインでの打ち合わせを行うなど、一年をかけて課題に向き合う。現地活動にかかる費用の補助として、大学から活動支援金を支給する。

(9) 東京大学さつき会奨学金

東京大学に入学を志望する優れた女子生徒を対象として奨学生の選考を行う。入学前に申請し、候補者として選考されたら、本学入学後に奨学生採用手続きをとることにより正式に採用が決定する予約型奨学金で、一人当たり月額5万円が支給される。東大卒業生同窓会「さつき会」のOGの思いから生まれた制度。

(10) 女子学生向けの住まい支援

多様な学生が活躍することのできる支援体制の整備の一環として、本学教養学部前期課程に入学する自宅からの通学が困難な女子学生のために、キャンパスに近く、セキュリティや耐震性が高い安心安全な本学が提携する民間賃貸物件と、本学目白台インターナショナル・ビレッジの居室から100室以上用意し、月額家賃の一部支援(入学から最長2年間、月額最大30,000円を補助)を行っている。

■ウェブサイト『キミの東大』

東京大学高大接続研究開発センターが運営する、高校生・受験生が東京大学をもっと知るためのオンラインメディア。東京大学での最先端の研究や本学における教育や学生生活など、東大生の目線も交えながら東大の学びをリアルに伝えます。

<https://kimino.ct.u-tokyo.ac.jp/>



校当たりの推薦人数の上限を従来の2名から4名へ倍増させました。学校の授業の内外で、自らの興味・関心を活かして幅広く学び、その過程で見出される諸問題を関連づける広い視野、あるいは自らの問題意識を掘り下げて追究するための深い洞察力を真剣に獲得しようとする人を東京大学は歓迎します。

東京大学の重要な目標に、女性学生を増やすことがあります。そのために、全国10都市での大学説明会等への参加とは別に、女子中高生のための大学説明会の開催や進路選択支援活動を行っています。また、在学女子学生による学校訪問事業の実施、女子学生向けの返還義務のない「東京大学さつき会奨学金」、さらに、自宅からの通学が困難な女子学生を対象にした住まい支援など、女子学生への支援体制を拡充しています。このように、東京大学では教育における独自のプログラムに加えて、学生の多様性を増すことで、さらに活力ある大学を目指しています。

08 森山理事・副学長からのメッセージ

今、世界は地球環境の変動や国際的な紛争、経済の不安定化や社会の分断といったさまざまな課題を抱えて

を通じて、国際的な活動に取り組む動機付けを行います。また、前期課程の修了要件でもある外国語科目の学修や、外国語による授業科目の履修に取り組みます。さらに、こうした活動を通して身につけた国際感覚をもとに、短期のサマープログラムや交換留学に参加して、国際的な学びを深めます。基礎講座の受講、外国語科目の学修、そして、自身の第一言語以外による授業科目の履修または海外での活動への参加を完了すると、国際総合力が認定されます。

海外の大学との交流プログラムとしては、各学部やグローバル教育センターが企画・実施している短期留学プログラムや交換留学制度があります。特に、全学交換留学「USTED」は全学生が対象で、留学先への授業料の支払いは不要、90以上の協定校に1学期〜1年間留学できる仕組みで毎年数百名の学生が留学します。2021年度から新たに開始した「Tokyo Global Unit Courses (TokyoGUC)」は、海外の学生向けに英語で行われる短期受入プログラムではありますが、東京大学の学生も参加し、学内で海外学生と共に英語で学ぶことができます。

また、東京大学では、世界が直面する課題を多角的に捉え、より良い社会の実現と変革を推進するリーダーシップを育み、国際総合力を高めるための「グローバルリーダー育成プログラム(GLP)」を開講しており、すべての学部学生の参加を歓迎しています。

このGLPには二つのプログラムがあります。一つは英語でリーダーシップを学ぶ「グローバルリーダー育成プログラム-I (GLP-I)」です。GLP-Iでは、グローバル教養科目、海外体験を伴う学生主導のプロジェクト、その成果発表など、グローバル教育センターが中心となって提供する多様な英語による教育プログ

ラムを通して、多様性、公平性、包摂性を伴うリーダーシップスキルとチームワークスキルの習得を目指します。

二つ目は日本語と英語に加え、もう一つの言語(ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、スペイン語、韓国朝鮮語)で学ぶ「グローバルリーダー育成プログラム-II (トライリンガル・プログラム) (GLP-II (TLP))」です。GLP-II (TLP)は、複数の言語を高度に習得するとともに、海外での学び(海外体験)などを通して、世界が直面する諸課題を多面的・多言語的に考え、グローバルリーダーに必要な知見と姿勢を体得することを目指します。

06 学びを社会課題につなげる実践力を涵養

学 生の自主的な創造力をはぐくむ機会としての体験型活動も活発です。海外での体験や実社会での多様なプログラムを構築し、学生たちは自分の関心や目的に合わせて、夏休み期間などを利用して体験することができま

その一つが、異なる生活や文化・価値観に触れるための「体験活動プログラム」です。これは、数日から1カ月くらいの期間、主に休暇中に国内外を問わずさまざまな場所で開催される活動、就労体験、地域活動やフィールドワークに参加し、現地の体験をするプログラムです。2012年度からスタートした本プログラムには、これまで延べ約5000名の学生が参加し、正規の授業では得られない貴重な学びを経験しています。

他にも「フィールドスタディ型政策協働プログラム」を実施しています。このプログラムは、社会的課題にチャレンジするリーダー人材を育成するため、趣旨に賛同した地方自治体の

し、多様な主体との共感力・対話力にもついで新たな地平を構想し、それを協働的に実現する資質が必要です。

このような見通しのもとでは、単純な専門知識の深化だけでは対応が不可能な幅広い、ある意味では全人的な資質の涵養が求められるでしょう。

東京大学は、このような観点から学士課程を通じて学生の学びに全力を尽くす所存です。